

平成22年度研究報告書

児童養護施設における心理職のあり方に関する研究

研究代表者 増沢 高 (子どもの虹情報研修センター)
共同研究者 内海 新祐 (旭児童ホーム)
古谷みどり (光の子どもの家)
杉山 史恵 (湘南学園)
榎原 真也 (子どもの虹情報研修センター)
相澤林太郎 (子どもの虹情報研修センター)

社会福祉法人 横浜博萌会

子どもの虹情報研修センター

(日本虐待・思春期問題情報研修センター)

平成22年度研究報告書

児童養護施設における心理職のあり方に関する研究

子どもの虹 情報研修センター

目 次

I. 問題と目的	1
II. 方法	2
III. 結果	3
1. 協力者の属性	3
2. 設問に対する回答	5
3. 統計的分析	11
4. 質的分析	13
4-1 生活場面での有効な関わり	13
4-2 施設の心理職としてのやりがいや魅力	20
4-3 施設の心理職として困難に感じる事	24
4-4 心理職が養育・支援を担うチームの一員として機能するために大切な事	28
IV. まとめ	32
V. 文献	35

I. 問題と目的

児童養護施設（以下、施設）への心理治療機能の強化を目的に、1999年に施設に心理職が配置されてから10年以上が経過した。この間心理職を導入する施設は増加し、2007年の調査では72.8%の施設で心理職が導入されている（全国社会福祉協議会、2007）。

施設と一言と言っても、その形態や規模、伝統や文化は多彩であり、それにとまなう心理職の勤務のあり方もさまざまである。常勤・非常勤の勤務形態の違いはもちろんのこと、直接支援を行う職員の一員として生活支援を担う心理職もいれば、面接場面以外では極力子どもにかかわらない心理職も存在する。さらに心理職の入れ替わりが頻繁で、比較的年齢が若く経験の浅い心理職が多いことが指摘されている一方で（加藤、2002；井出、2010）、長期にわたって常勤として定着している心理職も存在するようになってきた。ところで、心理職の常勤雇用のための予算措置がなされ、積極的な心理支援が期待されている現実がありながらも、生活場面と心理療法場面を全く切り離して考える心理職のあり方については現場の施設側から疑問も呈されており、施設という生活の場での心理職のあり方について、現実に即した検討が求められている（村瀬、2011）。

通常、心理療法は、生活空間から離れた非日常的な時間と空間の中で行われるものである。しかし、施設での心理療法は、生活の場の中で行われるものであり、治療構造が極めて曖昧で日常の影響を受けやすく、施設心理士には特有の困難が生じやすい。こうした課題を解決していくためには、面接場面と生活場面を物理的・心理的に明確に区分し、1対1の面接を基本とする従来の外来での援助モデルにとらわれない柔軟なアプローチを展開していくことの必要性が指摘されている（加藤、2005）。内海（2005）は、施設における心理職の役割は、「心理療法によって傷ついた子どもを癒す」というイメージではなく、心理職としての視点を提供し、「連携によって生活の一助となること」が基本となると述べている。

心理職がケアワーカーと同じように生活支援に携わることや、生活場面で子どもにかかわることに対しては慎重な意見もあるが、子どもの生活の様子を知り、ケアワーカーと情報を共有することについての重要性は諸家の指摘するところである。いずれにせよ、これまで心理臨床の世界で十分に培われてこなかった、生活を基盤とした支援のスタイルを展開していくことにはさまざまな困難が伴う。心理職にとって、施設という新たなコミュニティで活動することは、自らのアイデンティティを模索することの連続であるが、その一方で、負担や困難だけではなく、多くの心理職は施設という新たな場所での臨床活動に大きなやりがいや魅力も感じていることも事実ではないだろうか。また、現場で働く施設職員にとっても、心理職の導入によって自らの役割や専門性が問い直されているような事態として認識されていることが示唆されている（井出、2010）。

施設の直接支援職員と心理職が、お互いの専門性を尊重しあい、子どもの最善の利益に向けた生活環境を作り上げていくためには、まずは施設に心理職が導入されてからこれまでに積み上げられた経験や知見に学ぶことが大切となろう。したがって、本研究では、施設の心理職の勤務実態を把握し、そこで感じている施設心理職独自の実感や工夫を尋ねることによって、施設での臨床活動のあり方に

ついて検討することを目的とする。

前述のように施設の形態や文化は多様性に富み、それにもなって心理職に求められる役割もさまざまであるため、一律に理想的な心理職のあり方について述べることは難しい。しかし、制度導入から10年が経過した段階で、これまでの実践から導かれた心理職自身の活動や実体験を整理することによって、今後の児童養護施設に求められる心理職のあり方について一定の示唆が得られると考える。

Ⅱ. 方法

加藤（2002）、有村ら（2007）、井出（2010）などの調査を参考に、特に心理職自身が感じている魅力や困難性、生活場面での支援のあり方や職員チームの構築について工夫している点などを中心に質問紙を作成した。調査対象は、平成22年度子どもの虹情報研修センター研修の「児童福祉施設心理担当職員合同研修A」「児童福祉施設心理担当職員合同研修B」に参加した合計100名の児童養護施設心理担当職員である。質問紙は研修の事前課題として、平成22年8月に回答を依頼し、10月に回収して集計を行った。

(檜原 真也)

Ⅲ. 結果

1. 協力者の属性

100名全ての参加者から有効回答が得られた。以下に協力者の属性を示した。

(1) 性別

男性	30
女性	70

対象となった協力者の性別は、「女性」が7割、「男性」は3割と、女性が多かった。

(2) 勤務形態

常勤	74
非常勤	26

勤務形態は、「常勤」がおよそ7割5分を占め、「非常勤」は2割5分であった。

(3) 年代

20代	53
30代	40
40代	7

年代は、半数以上が「20代」であった。また、9割以上を「20代」「30代」の若手の心理士が占めた。

(4) 資格

臨床心理士	49
大学院修了	33
大学院生	1
大学卒業	16
保育士	1

資格は、半数近くの協力者が、臨床心理士資格を所持していた。1/3の協力者が大学院を修了しており、大学を卒業して勤務している協力者も1割5分存在していた。

(5) S Vの有無と形態

個人S V（施設外）	50
個人S V（施設内）	13
グループS V	12
受けていない	25

スーパービジョンについては、施設外の個人スーパービジョンを受けている協力者が、半数に上った。また、「受けていない」と答えた協力者も1/4存在した。その他の協力者は施設内でのスーパー

ビジョンか、グループスーパービジョンという形をとっていた。

(6) 施設定員

～30人	10
31人～50人	39
51人～100人	46
101人～	5

施設の定員については、30人～100人までの施設が8割以上を占めた。

(7) 施設の形態

小舎	35
中舎	24
大舎	41

施設の形態については、「小舎」が3割強、「中舎」が2割強、「大舎」が4割となっていた。

(8) 勤務年数

0～3年	57
4～6年	30
7～9年	8
10年以上	5

勤務年数は、「0～3年」(57人)、「4～6年」(30人)の協力者が9割近くを占め、10年以上の協力者は5人にすぎなかった。

(9) 面接室やプレイルームの有無

あり	94
なし	6

ほとんどの協力者が面接室やプレイルームを持っていたが、「なし」と回答した者も6人いた。

2. 設問に対する回答

以下に、設問に対する協力者の回答を集計したものを示した。

(1) 現在の施設は、心理職の業務や役割を理解し、援助に必要な一員として位置づけていると思うか

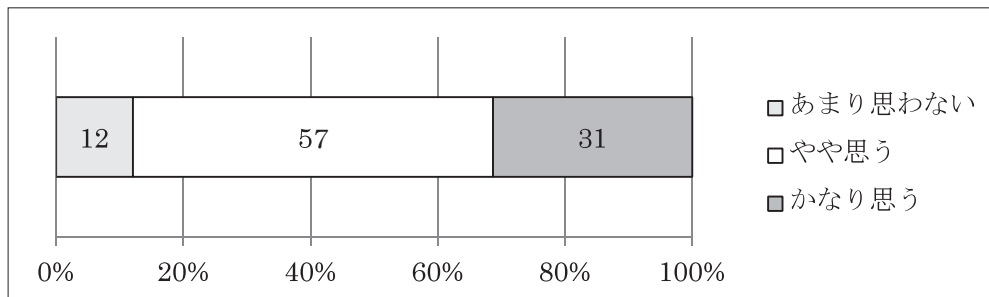


図1 心理職への理解

「ほとんど思わない」と答えた協力者はおらず、「あまり思わない」(12人)と答えた協力者が1割強であった。「やや思う」(57人)「かなり思う」(31人)と答えたものが9割近くを占め、多くの協力者が、現在の施設から理解され、援助に必要な一員として位置づけられていると感じていた。

(2) 施設の心理職として納得できる役割を果たしていると思うか

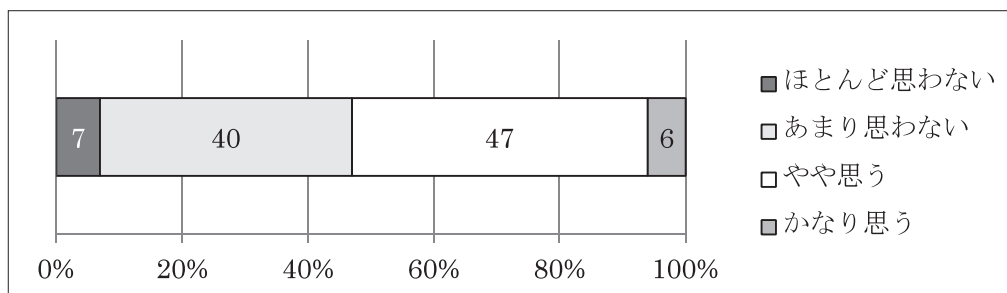


図2 納得できる役割を果たしているか

「ほとんど思わない」(7人)「あまり思わない」(40人)と答えた協力者が47人と、「やや思う」(47人)「かなり思う」(6人)と答えた協力者が53人と、拮抗する結果となった。

(3) 子どもの日常生活に関与しているか

(「はい」86名 「いいえ」14名)

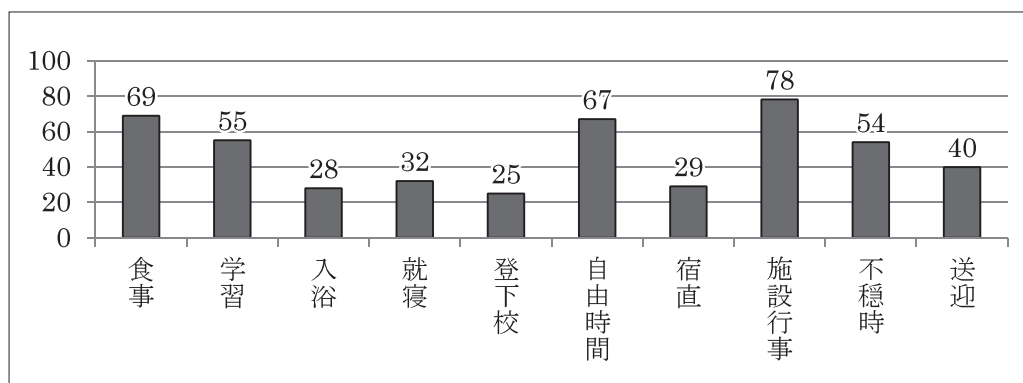


図3 日常生活への関与

8割5分の協力者が日常生活に関与していた。その内訳としては、施設行事、食事、自由時間、学習、不穏時の順となっていた。

(4) 施設の心理職が生活場面に入ることは大切であると思うか

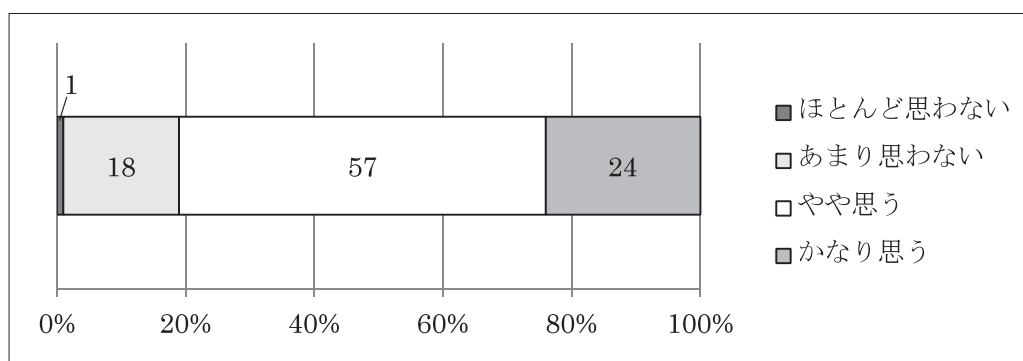


図4 生活場面への関与の重要性

「やや思う」(57人)という中庸な回答が半数以上を占めた。「ほとんど思わない」と回答した協力者は1名で、「あまり思わない」(18人)「かなり思う」(24人)と回答した協力者が2割前後であった。「ほとんど思わない」「あまり思わない」と回答した理由については、生活場面に入ることが、個人心理療法に影響することを懸念したものがほとんどであったが、「やや思う」と回答した協力者の中にも、同様の葛藤を抱えている者が半数近くに認められた。

(5) 下記の情報について、どれくらい把握に努めているかを、4段階で評価して下さい。また、それぞれの情報の入手方法について、あてはまる経路すべてに丸をつけて下さい。

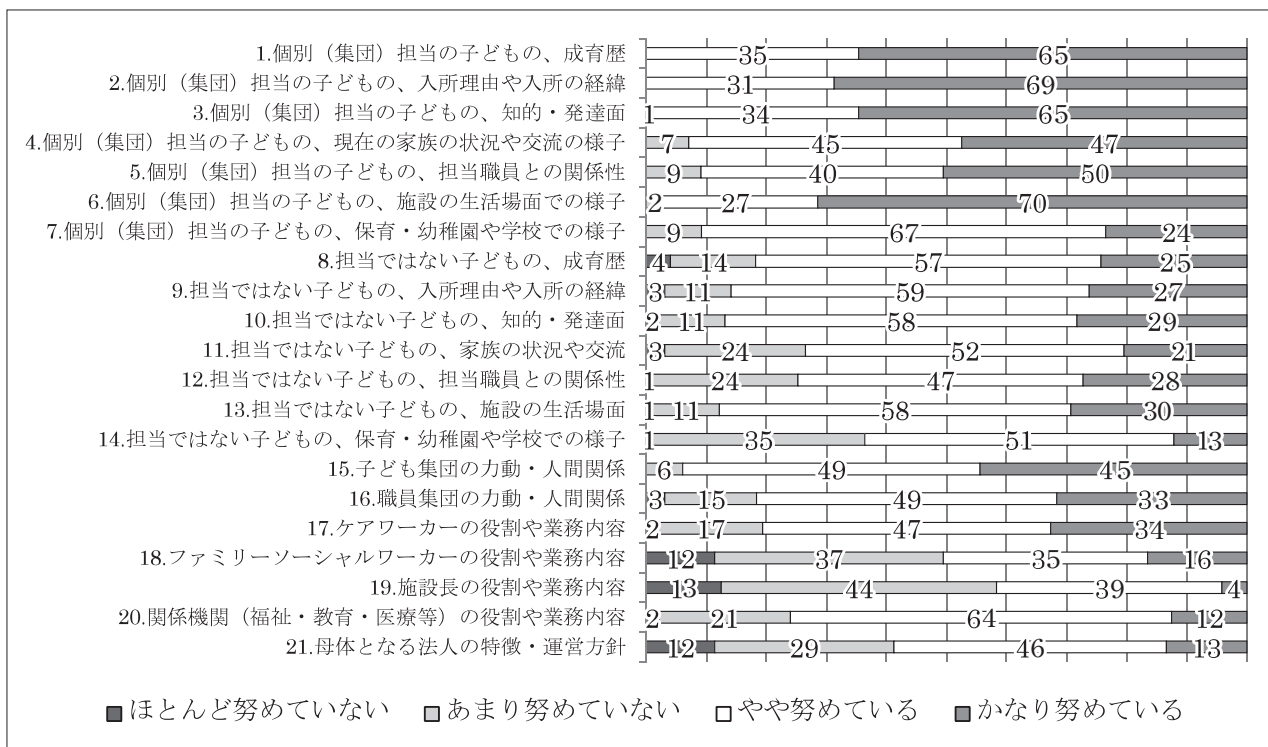


図5 情報の入手

担当の子どもの様子については、多くの協力者が情報の把握に努めていたが、担当ではない子どもの様子については、把握に努めている割合が低くなっていた。また、ケアワーカーの役割や業務については情報の把握に努めている協力者の割合が高くなっていたが、FSWや施設長の役割や業務については、低くなっていた。

表1 情報の入手経路の度数

	児童票	育成記録	会議への出席	引き継ぎ・申し送り	担当職員から	担当以外の職員から	施設長から	関係機関から	子どもから	子どもの家族から	直接観察	心理検査・質問紙
1 個別(集団)心理療法担当の子どもの、成育歴についての情報	95	72	68	49	84	57	30	44	50	11	53	29
2 個別(集団)心理療法担当の子どもの、入所理由や入所の経緯についての情報	96	62	61	43	68	52	30	45	42	7	29	11
3 個別(集団)心理療法担当の子どもの、知的・発達面についての情報	89	64	59	46	75	49	16	54	29	7	65	53
4 個別(集団)心理療法担当の子どもの、現在の家族の状況や交流の様子	50	63	79	61	91	60	23	39	62	15	35	13
5 個別(集団)心理療法担当の子どもの、担当職員との関係性	19	55	53	50	89	62	16	2	72	1	74	4
6 個別(集団)心理療法担当の子どもの、施設の生活場面での様子	21	66	68	65	95	67	19	6	66	4	88	7
7 個別(集団)心理療法担当の子どもの、保育園(幼稚園)や学校での様子	22	56	68	58	92	54	13	45	70	2	35	3
8 個別(集団)心理療法担当ではない子どもの、成育歴についての情報	89	70	63	41	70	46	18	28	30	8	36	11
9 個別(集団)心理療法担当ではない子どもの、入所理由や入所の経緯についての情報	92	61	62	39	63	49	23	35	21	5	23	9
10 個別(集団)心理療法担当ではない子どもの、知的・発達面についての情報	84	64	59	40	68	42	17	40	19	4	52	35
11 個別(集団)心理療法担当ではない子どもの、現在の家族の状況や交流の様子	49	61	72	52	74	46	18	24	35	8	27	7
12 個別(集団)心理療法担当ではない子どもの、担当職員との関係性	16	54	52	52	83	59	16	2	46	1	72	3
13 個別(集団)心理療法担当ではない子どもの、施設の生活場面での様子	17	58	64	61	84	60	12	5	49	1	79	3
14 個別(集団)心理療法担当ではない子どもの、保育園(幼稚園)や学校での様子	18	54	65	58	82	55	10	26	43	1	28	3
15 子ども集団の力動・人間関係	18	49	61	58	85	75	24	9	65	1	89	4
16 職員集団の力動・人間関係	4	10	50	35	61	57	38	2	29	1	81	2
17 ケアワーカーの役割や業務内容	5	21	61	45	67	54	39	5	13	2	57	1
18 ファミリーソーシャルワーカーの役割や業務内容	1	10	55	37	65	34	34	8	5	2	39	0
19 施設長の役割や業務内容	1	1	52	28	20	32	70	7	4	0	40	0
20 関係機関(福祉・教育・医療等)の役割や業務内容	14	15	56	33	40	35	45	62	8	0	20	0
21 母体となる法人の特徴・運営方針	1	1	56	21	20	21	75	12	0	0	14	0

7割以上の協力者が○をつけた項目を濃い灰色(■)で、5割以上の協力者が○をつけた項目を薄い灰色(□)で示した。協力者の多くは、特に「子ども票」から家庭での生活の様子を、「担当職員から」子どもたちに関する情報の多くを把握していることが読みとれた。「育成記録」「会議への出席」「引き継ぎ・申し送り」「担当ではない職員から」「直接観察」も大切な情報源となっていた。「施設長から」「関係機関から」「子どもの家族から」「心理検査・質問紙」の割合は低くなっていた。

(6) 施設にいる時間に何をしているか、あてはまる番号全てに○をつけ、概ね週に約何分間行っているか記入して下さい（年間を通しておよその平均で結構です）。また、負担感（負担、疲労、苦痛、難しさ）と有効感（やりがい、手ごたえ、魅力、楽しさなど）を4段階で評価して下さい。

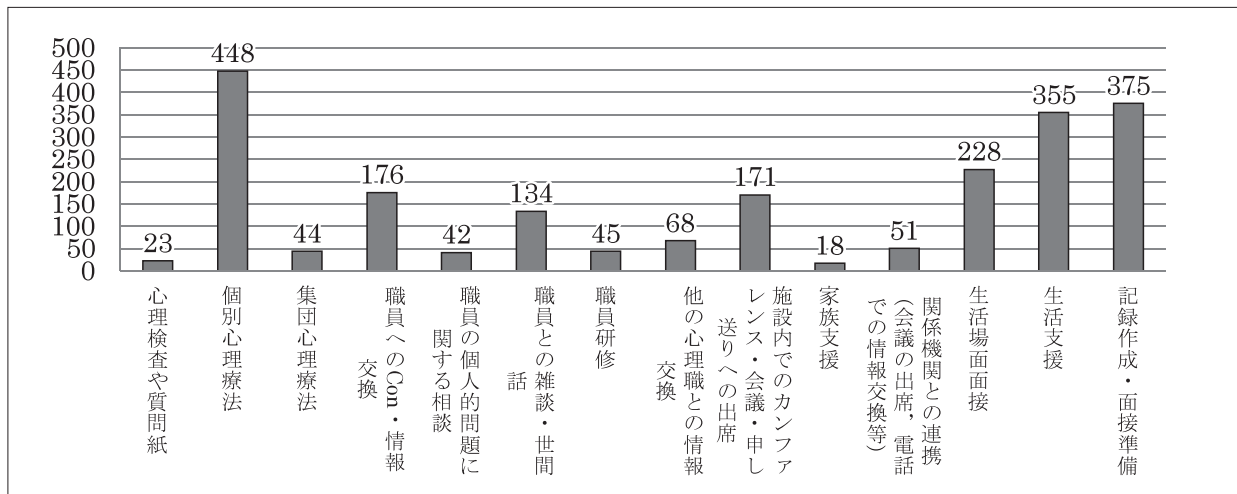


図6 業務時間の平均値

(コンサルテーションはConと略記)

業務時間としては、「個別心理療法」が448分と最も長く、次いで「記録作成・面接準備」が375分と、個人心理療法とその前後の時間が多くの時間を占めていた。続いて「生活支援」が355分、「生活場面面接」が228分と、生活の中での時間となっていた。「職員へのコンサルテーション・情報交換」が176分、「施設内でのカンファレンス・会議・申し送りへの出席」が171分、「職員との雑談・世間話」が134分と、他職員との情報交換も多くの時間を占めた。

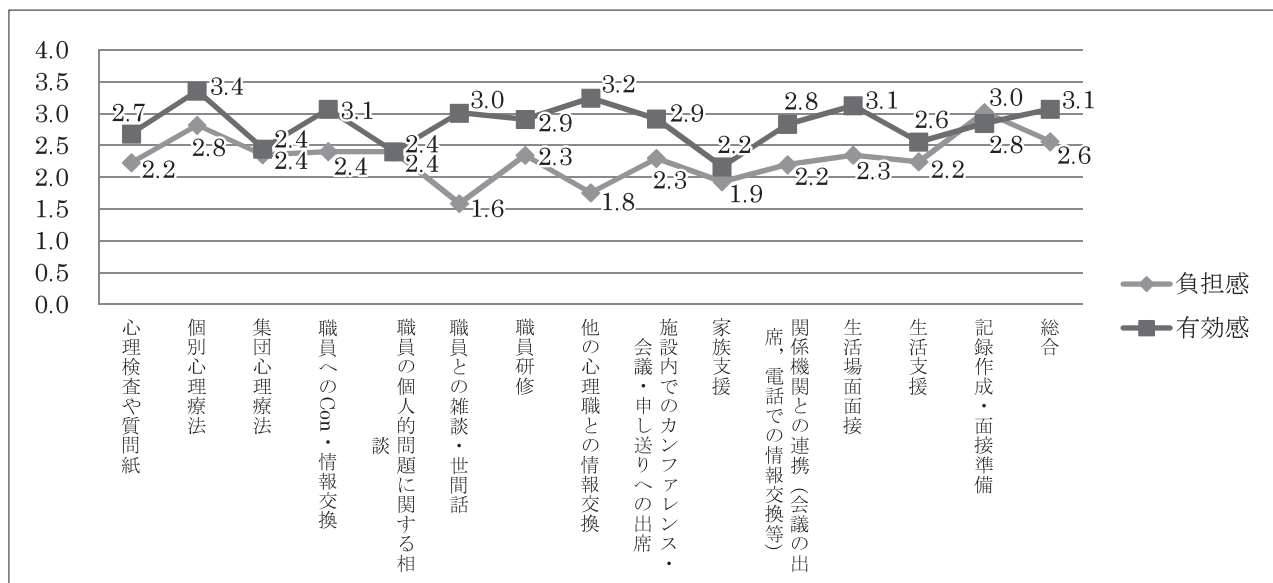


図7 有効感・負担感の平均値

有効感については、「個別心理療法」(Av=3.4)が最も高くなっていた。負担感については、「記録作成・面接準備」(Av=3.0)が最も高くなっていた。「記録作成・面接準備」のみ有効感より負担感が高くなっていたが、総じて負担感よりも有効感の方が高く、多くの協力者が負担感を上回る有効感を感じていた。

(7) 上記の業務内容の中で、①あなたが特にやりがいや魅力を感じている業務について、②あなたが特に負担や難しさを感じている業務について、③特に施設で心理職が受け入れられ、養育・支援を担うチームの一員として機能するために大切な業務について上位3項目をお教え下さい。

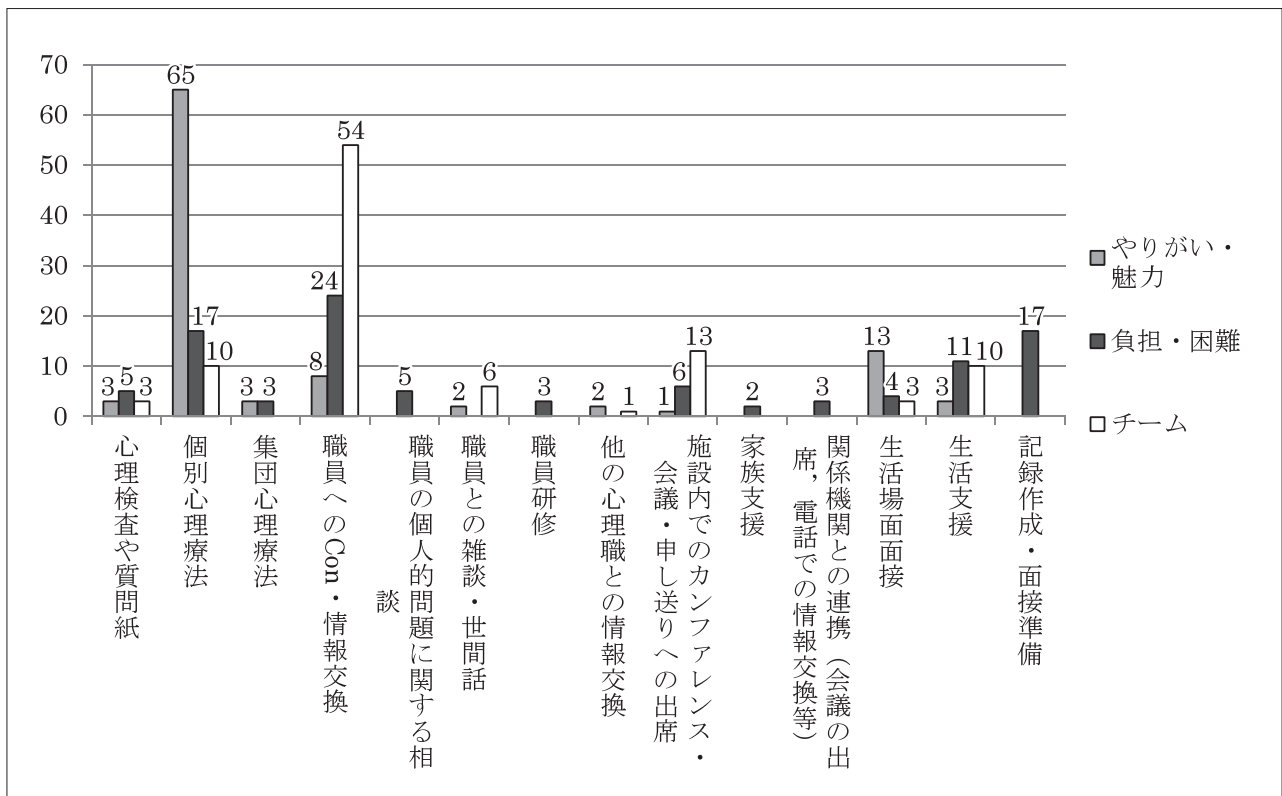


図8 1位として選択された仕事の度数

①やりがいや魅力を感じている仕事、②負担や困難を感じている仕事、③チームの一員として機能するために大切な仕事、の各1位として選択されたものを示した。魅力を感じている仕事としては、「個別心理療法」(65人)が6割以上と集中し、大きく開いて、「生活場面面接」(24人)「職員へのコンサルテーション・情報交換」(17人)の順となっていた。困難を感じている仕事としては、「職員へのコンサルテーション・情報交換」(24人)が1/4近くであり、次いで「個別心理療法」(17人)「記録作成・面接準備」(17人)が並んだ。チームの一員として機能するために大切な仕事としては、「職員へのコンサルテーション・情報交換」(54人)が半数以上を占め、次いで、「施設内でのカンファレンス・会議・申し送りへの出席」(13人)、「個別心理療法」(10人)「生活支援」(10人)となっていた。

3. 統計的分析

協力者の属性によって、「心理職の理解」、「施設の心理職として納得できる役割を果たしていると思うか」、「情報入手の経路」、「勤務時間」、「有効感」、「負担感」に統計的な差が認められるかについて分析を行った。「スーパービジョンの有無」「施設定員」「施設形態」については、大きな差は認められなかった。

差の認められた「勤務年数」（3年以下の群と4年以上）、「勤務形態」（非常勤と常勤）についての分析結果を以下に示す。分析には、SPSS19を使用した。分析に際しては、標本数が十分でないため、マン・ホイットニーの検定を行った。表は「勤務年数」「勤務形態」の違いごとに、各項目の平均値を示した。検定の結果、有意差が認められたものについては、検定統計量 u と、有意確率 p を示した。なお、「負担感」については、有意差が認められなかったため、表示していない。

勤務年数の違いによる比較では、「納得できる役割を果たしている」、情報入手では「個別（集団）担当の子どもの家族状況」「担当ではない子どもの成育歴」「担当ではない子どもの知的・発達面」「担当ではない子どもの現在の家族の状況や交流の様子」「担当ではない子どもの担当職員との関係性」「担当ではない子どもの保育・幼稚園や学校での様子」、勤務時間では「個別心理療法」「記録作成・面接準備」、有効感では「職員へのコンサルテーション・情報交換」「職員の個人的問題に関する相談」「施設内でのカンファレンス・会議・申し送りへの出席」「生活場面面接」の各項目に有意差が認められた。

勤務形態の違いによる比較では、「施設の心理職として納得できる役割を果たしていると思うか」、情報入手では「担当ではない子どもの成育歴」「担当ではない子どもの入所理由」「担当ではない子どもの知的・発達面」「担当ではない子どもの現在の家族の状況や交流の様子」「担当ではない子どもの施設の生活場面での様子」「担当ではない子どもの、保育・幼稚園や学校での様子」「ケアワーカーの役割や業務内容」「施設長の役割や業務内容」、勤務時間では「職員の個人的問題に関する相談」「職員との雑談・世間話」「職員研修」「他の心理職との情報交換」「施設内でのカンファレンス・会議・申し送りへの出席」「生活支援」の各項目に有意差が認められた。

上記の内容をまとめると、①勤務年数4年以上または非常勤職員の方が、「施設の心理職として納得できる役割を果たしていると思う」と感じている、②勤務年数4年以上または常勤職員の方が、担当職員以外の子どもの様子や、他職種の仕事の内容について理解しようと努めている、③勤務年数4年以上の方が、個別心理療法の時間が長く、記録作成や面接準備にかかる時間が短い、④常勤の方が、他の職員との情報交換や雑談、会議への出席の時間、生活支援の時間が長い、⑤仕事の負担感は勤務年数や勤務形態にかかわらず変化しない一方で、勤務年数4年以上の方が、コンサルテーションや会議申し送り、生活場面等での有効感が高い、といった結果が示された。

表2 勤務年数と勤務形態による違い

		勤務年数		u		p		勤務形態		u		p	
		~3年	4年~			非	常勤						
	心理職の理解	3.1	3.3			3.4	3.1						
	納得できる役割を果たしているか	2.4	2.7 *	1529.50	.027	2.8	2.4 *	1243.50	.015				
情報入手	担当の子どもの生育歴	3.6	3.7			3.6	3.7						
	担当の子どもの入所理由	3.6	3.8			3.6	3.7						
	担当の子どもの知的発達	3.6	3.7			3.7	3.6						
	担当の子どもの家族状況	3.3	3.6 *	1513.00	.033	3.5	3.4						
	担当の子どもの担当職員との関係性	3.3	3.6			3.4	3.4						
	担当の子どもの生活での様子	3.6	3.8			3.7	3.7						
	担当の子どもの学校での様子	3.0	3.3			3.0	3.2						
	他の子どもの生育歴	2.9	3.2 *	1508.50	.035	2.8	3.1 *	704.50	.023				
	他の子どもの入所理由	3.0	3.3			2.9	3.2 *	712.00	.026				
	他の子どもの知的発達	3.0	3.4 *	1541.50	.017	2.9	3.2 *	721.00	.032				
	他の子どもの家族状況	2.7	3.2 **	1604.00	.005	2.6	3.0 **	645.00	.006				
	他の子どもの担当職員との関係性	2.8	3.3 *	1578.00	.011	2.8	3.1						
	他の子どもの生活での様子	3.1	3.3			3.0	3.2 *	741.00	.049				
	他の子どもの学校での様子	2.6	3.0 **	1606.00	.005	2.5	2.9 *	702.00	.024				
	子ども集団の力動・人間関係	3.3	3.5			3.3	3.4						
	職員集団の力動・人間関係	3.0	3.3			3.0	3.1						
	ケアワーカーの役割や業務内容	3.0	3.3			2.8	3.2 **	632.50	.005				
	FSWの役割や業務内容	2.5	2.6			2.3	2.6						
	施設長の役割や業務内容	2.3	2.5			2.0	2.5 **	608.50	.003				
	関係機関の役割や業務内容	2.8	2.9			2.8	2.9						
法人の役割や業務内容	2.5	2.7			2.4	2.7							
勤務時間	心理検査	16	20			14	19						
	個別心理療法	375	538 *	1587.50	.015	401	458						
	集団心理療法	15	60			38	32						
	コンサルテーション・情報交換	140	212			166	172						
	個人的相談	24	39			16	36 *	715.50	.038				
	職員との雑談・世間話	135	131			73	154 **	529.50	.001				
	職員研修	39	41			28	44 *	698.50	.034				
	他の心理職との情報交換	71	47			94	49 **	1354.50	.002				
	施設内での会議申し送り	175	164			123	187 *	676.00	.023				
	家族支援	10	17			2	16						
	関係機関との連携	35	53			21	50						
	生活場面接	214	220			144	240						
	生活支援	304	287			70	370 **	525.00	.000				
	記録作成・面接準備	414	325 *	926.50	.031	337	391						
	有効感	心理検査	2.9	2.9			2.9	3.1					
個別心理		3.3	3.4			3.3	3.4						
集団心理		2.8	3.2			2.9	3.3						
コンサルテーション・情報交換		2.9	3.2 **	1449.00	.047	3.1	3.0						
個人的相談		2.3	2.8 **	481.00	.017	2.4	2.6						
雑談・世間話		2.9	3.1			3.0	3.1						
職員研修		3.0	3.1			3.0	3.1						
他の心理職との情報交換		3.3	3.4			3.3	3.4						
施設内での会議申し送り		2.8	3.1 *	1447.00	.033	2.9	2.8						
家族支援		2.6	2.9			2.8	2.5						
関係機関との連携		2.8	3.1			2.9	2.9						
生活場面接		2.9	3.4 **	1222.50	.004	3.2	3.0						
生活支援		2.5	2.9			2.7	2.8						
記録作成・面接準備		2.8	2.9			2.9	2.8						
有効感総合		3.0	3.2			3.1	3.0						

(橋原 真也)

4. 質的分析

以下の自由記述の質問項目について質的分析を行った。それぞれの質問項目について、KJ法に準じて分類を行い、統計的分析において有意差のあった、経験年数による比較（3年以内と4年以上）、勤務形態による比較(常勤と非常勤)を行った。

表3は勤務年数別、勤務形態別の人数を示したものである。

1. 「生活場面のどのような子どもへの関わりが有効だったか、具体的にお聞かせ下さい」
2. 「施設の心理職として、特にやりがいや魅力を感じる場所があればお聞かせ下さい」
3. 「施設の心理職として、特に難しさや負担を感じる場所があればお聞かせ下さい」
4. 「施設で心理職が受け入れられ、養育・支援を担うチームの一員として機能するために大切なことは何かお聞かせ下さい」

表3 勤務年数別・勤務形態別の協力者の人数

勤務年数		勤務形態	
1～3年	4年以上	常勤	非常勤
55	43	74	26

4-1 生活場面での有効な関わり

(1) KJ法による分類結果

自由記述「生活場面のどのような子どもへの関わりが有効だったか、具体的にお聞かせください」に記入されたものについてKJ法に準じて分類した。回答率78%（78/100人）。

分類方法については、一人の協力者の回答に複数の意味が含まれているものについては、文章を意味のかたまりに分け（計135回答とした）、似た意味のものをまとめて概念名をつけ（表4）、それらの概念間の関係性を図9にまとめた。

この質問項目について記入した協力者のうち（22名無記入）78名中71名（91%）が生活場面での関わりについて、なんらかの有効性があった関わりの記述をしている。勤務年数が短く、「まだ有効かどうかと知るまでには至ってない」「思いつかない」と答えた協力者、「有効だったと思えたことはない」など有効性を記述していない協力者は、78名中7名であった（9%）。

生活場面での関わり、または生活への参加について、有効だと感じた具体的な場面としてあげられたもののうち、多かった場面は学習、食事、入浴、行事であり、他に自由時間、遊び、学校、送迎などが続いている。リラックスした場面という記述もあった。

【日常の子どもの様子を見ることで理解が深まる（子ども、関係性のアセスメント）】

この記述はもっとも多く全体の5分の1を占める（38回答）。「構えない状況の子どもをみることができる」「個別でみせる表情とはまた違ったものがある」「たくさんの視点が得られる。すべての場面

表4 抽出された概念項目（数字は分割した回答の数：全160）

概念名	勤務年数		勤務形態		総数
	1～3年	4年以上	常勤	非常勤	
【日常の子どもの様子を見ることで理解が深まる】	19	19	18	20	38
【何気ない自然な関わりができる・生活場面面接】	15	15	24	6	30
【トラブルなどの介入】	7	7	14	0	14
【子どもとの関係の構築】	3	4	6	1	7
【面接と生活の連続性の保証、広がりを促すことができる】	4	5	7	2	9
【子どもと職員の間に入り関係を調整できる】	4	5	8	1	9
【CWと情報共有・連携強化・コンサルテーションにつながる】	2	8	5	5	10
【心理士としての立場の確立】	3	0	1	1	3
【施設職員としての機能】	1	3	3	1	4
【外部機関につなぐことができる】	1	1	1	1	2
【やりにくい】	1	1	2	0	2
【(まだ) わからない、見出せない】	4	0	2	2	4
【その他、場面の記述のみなど】	3	0	1	2	3
無回答	12	10	17	5	22

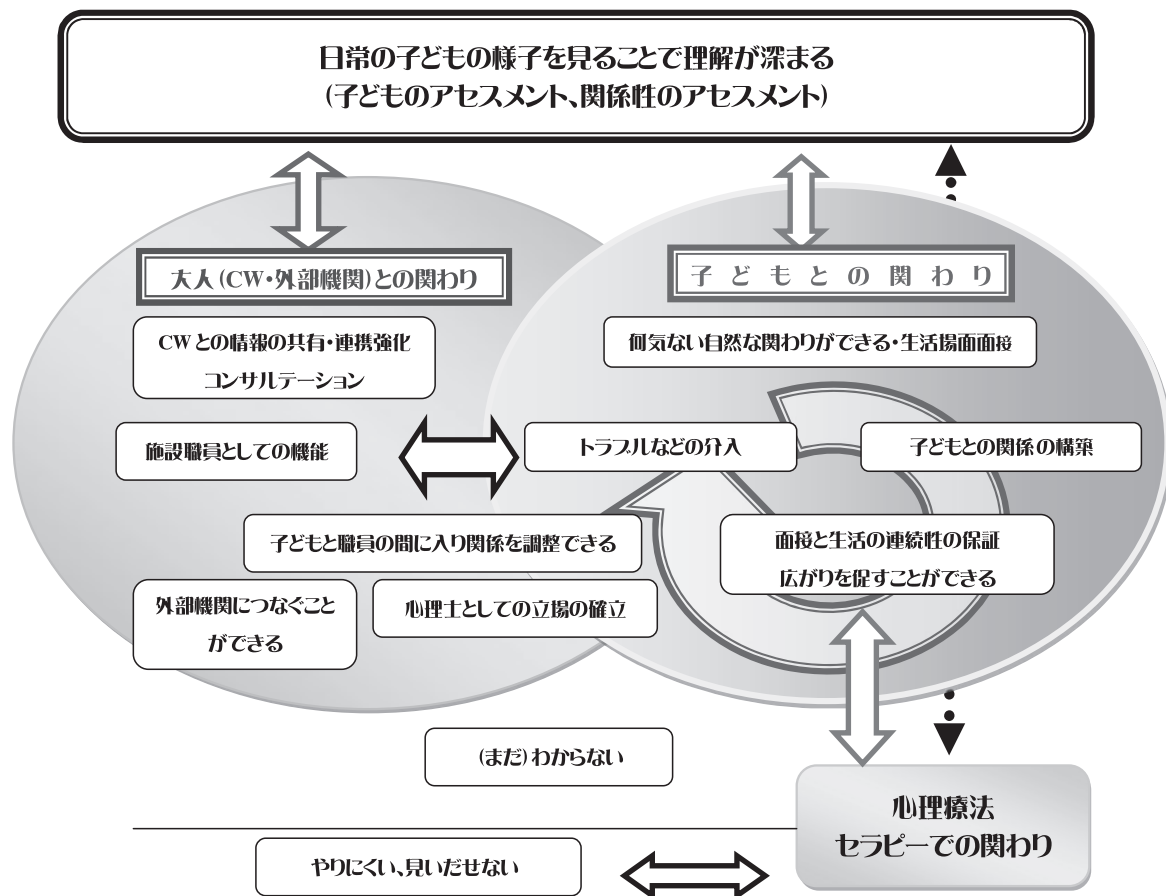


図9 概念間関係 [生活場面での子どもへの有効な関わり]

が有効」というように、個人面接・セラピーだけではとらえきれない、違った様子を把握するいい機会になっているとの記述が多く、「総合的にとらえやすくなる」というような記述もあり、子どもの全体像を把握することにより、見立て・アセスメントが進み、援助方針をたて、組みなおす、ケースワークにも有効という協力者もいた。

1対1の場面など限定された場面だけでなく、生活の場の方が子ども同士の関係、大人との関係、集団場面での動きなどの対人関係を観察できることも利点だという協力者も多い。これは「自由時間では施設内での友人関係や圧力関係が知れるため」や「食事場面等に同席することで、個別の関わりでは見えてこない職員との関係性、子ども同士の関係性・・・などが把握できる」といった記述にみられる。

学習場面で接すると、その子どもがもっている課題などが見えやすく、援助方針が立てやすいという記述も多い。例えば「取り組み方や能力の使い方がみれる」、「状態がわかり、支援の必要性を判断できる」、「認知の特性がわかり・・・援助方針がたてやすい」といった記述である。

これ以降示す通り、子どもの理解が進むことで、心理療法・セラピーへのつながりやその発展、コンサルテーション、外部機関との連携などさまざまな援助につながっていくという流れがみられた。協力者によって方向はさまざまだが、子どもの理解の深まりが起点となり、心理療法・セラピー、介入のしやすさ、コンサルテーションなどに援助が展開していくという利点があるようである。

【何気ない自然な関わりができる・生活場面面接】

子どもの状態像を把握することの次に多かった記述が【何気ない自然な関わりができる・生活場面面接】であった。そのような関わりによっても援助の幅が広がっていくことがみられた。

「生活の場だからこそ身近な話もできる」「入浴のときに・・・思っていることをきく」「就寝前の自由時間（は）一日の中で一番気持ちが落ち着いている時間・・・自分の気持ちを話してきたり、困っていることを伝えてくれたり、一緒にリラクセス法をしたりと、有効に関わっている」「子どもたちが相談したい時に応じることができる」など自然な関わり・会話の流れの中でコミュニケーションをとり、子どもが自分の話をするようになる、生活の場での相談、場合によっては心理面接につながるようになるようである。

不登校になったケースの記述で、「（心理職が）生活場面に入っていたことで・・・生活の中の自然な流れの中で話をしたり、話を聞いたりすることができた」というものがあるように、生活でしか関われない子どもへのアプローチができるという利点もあるようである。

また、生活場面で「褒められたことを一緒にその場で喜べたこと」など子どもと体験を共有したり、「食事場面で注意されがちな子どもに対して、少しでもいいところを見つけて声かけをしていたら、周りの職員もその場面に乗ってくれて、（その場面で）いい意味で（その子どもが）主役になることができた」など、時に生活リズムに沿った自然な介入的な関わりによって、周囲の子どもや職員の子どもの接し方に影響を与える関わりをしている協力者もいた。

【トラブルなどの対応、介入】

生活する場面におけるトラブルについて、その場にいることで、時間差がなく、子どもの体験に沿った対応・介入を可能にしているようである。「仲裁に入って、加害側の話もよく聞くようにすると、わりとすぐにおさまることが多い。『どうしてそんなことしたの?』とすぐに理由を聞き、後から注意すると反省も入りやすいと思う」という個人介入の記述から、「パニックになっている子どもに対応する職員とチェンジして子どもの思いを聞いた時」というようなチームワークの中での介入・支援ができるという利点を記述している協力者もいた。また「ちょっとしたトラブルが起きた際（可能であれば）集団へのアプローチの形で対人関係について一緒に話をし、考えるという機会を持てた時」というように、個の問題から集団へのアプローチという広がりをもった介入を行うことについての記述もあった。

一方で、トラブル（職員と子どもの間に生じるトラブルも含まれる）の介入以外は「やりづらさしかな」という記述があったことも軽視できない。この点については後述する。

【子どもとの関係の構築】

これは、生活で関わることで子どもとの関係を構築できるという記述である。「関係がもちやすくなる」「深まる」「いざというとき介入しやすくなる」というように、生活に入ることで関係作りのきっかけをもつことができ、それを深め、介入へつなげていくという連続性がみられた。

また「面接室やプレイルームへ入ることを拒む子どもに対して生活場面で接することから関係を築けた」という記述もあった。これは、二人でいるということへの準備としての関係作りということになるだろう。生活場面では比較的自然に接することができるという意味で、二人になるのが苦手な子どもにとっては、安全感を保ったまま無理のない関わりになるということが示されている。

【面接と生活の連続性の保証・広がりをもつことができる】

子どもと生活で関わることで、心理療法・セラピーとの連続性が保証されるという意味の記述があった。子どもが心理療法・セラピーにつながりやすくなることに加え、子どもにとっても両場面の体験のつながりが体験できる、さらに心理職も心理療法・セラピー場面と生活との連続性の中で関わりができるという利点があるようである。心理職としては、心理療法・セラピー場面における行動などの背景を知ることができるようになるなど見立ても立てやすくなり、心理療法・セラピーへの構えができ、より有効に働くという実感を示す記述もあった。子どもにとっても心理職にとっても、面接・セラピーと生活の両場面の双方向的なつながりの実感が生まれることが利点としてあるようだ。

前の例でも示したが、子どもによっては1対1の関係に入ることに不安・怖さを感じることもある。そのような場合、生活場面で接し、話をしていく中で安心感をもってもらい、関わりを無理なく続けることができるというような、心理療法・セラピーへと移行していく準備段階になるような関わりを生活の中でできるという利点があるようである。

【子どもと職員の調整機能】

前述の通り、子どもとケアワーカーとの関係性を強化すること、また子どもと職員の関係性が緊迫していたり膠着状態にある場合、その間に入り調整していくことができるという記述もあった。「対人関係をとることが苦手な子どもに対して、職員や子ども同士の間にはいり、その関係をとりもつことができた。子どもが何か職員に頼みたい時…どのように頼めば良いのかを一緒に考え、その子が自分で職員に働きかけることを手伝うことができた」、「どちらも感情的になっていたので、第三者が入ったことで落ち着き、話をすることができた」、「悩みを伝えられない子どもと、相手への伝え方を考え実行することを繰り返して行った」などの記述からいえることであろう。

【情報交換・コンサルテーション】

「コンサルテーションがスムーズになる」、「職員への助言に生かせる」、「職員に生活の中で、こう関わってみては？」と具体的な提案ができた」など、生活場面での関わりがそのままコンサルテーションにつながるという記述もあり、「(状況を)把握することで、ケアワーカーと子どもについての情報交換がしやすくなる」など職員と同じ場面を共有すると、情報交換・コンサルテーションがよりスムーズに進むという形も示されていた。「職員に生活の中で、こう関わってみては？」と具体的な提案ができた」という直接的な助言もあるが、心理職が行った関わりを「新任ケアワーカーが見て、真似してやっている」というように間接的に子どもとの関わりを提示するという実践も示されていた。

【施設職員としての働き】

ケアワーカーの補助で入るという意味合いで、「心理職として明確な目的をもって入ることは少なく…」や「指導員としての仕事を中心」というように心理職の職業的な立場との違いを表す記述がある一方で、「補助的に入ることで役立つ」、「職員と同じ目線を共有できるのも良い」という記述があるように、心理職としての立場はあるものの、施設の職員として生活の場では同じ目線でいようとする姿勢もみられた。

【外部機関につなぐことができる】

学校への送迎など、日常生活の延長線上で他機関との連携がしやすくなるという記述もあった。「様子を学校に伝えることができた」時、学校の「先生方と話ができる」時という記述がある。生活での関わりを行いながら、その場で他の機関も含め直接、情報交換、コンサルテーションがしやすくなるようである。

【心理職としての立場の確立】

「心理士の存在を（子どもが）意識する」「…初めは私が何の先生で、いつもどこにいるのか知らない子もいたため、まずは“心理の先生がいる”程度でも知ってもらえる機会になったという点では良かったのかもしれない」、「行動観察という形で、生活場面での子どもの様子を観察するようになって

たことで職員の方から話しかけて下さることが増えた」といった記述がある。

心理職が生活に入ること、子どもに心理士としての自分を知ってもらうこと、心理士が子どもとの関係を深めること、心理療法・セラピーにつなげること、また職員にも自分の立場を知ってもらうことも含め、施設の心理士としての自分の立場を確立していく一つの方法として、生活場面に入ることが機能することもあるようである。

【やりにくい】【(まだ) わからない、見出せない】

生活に入ること、心理職としての職務との間で通常の仕事がやりにくくなることに関して記述があったのは、前述したトラブルへの介入に触れた上での「その他はやりづらさしかない」との記述や、「枠のなさが心理をやるのに大きな障害となっている」である。これに関しては、質問紙で生活に入ることに重要だと思うかという問いに対して19名が「ほとんど思わない」「あまり思わない」と回答している協力者がいることと関連していると思われ、自由記述の無回答(22名)もあわせ、「やりにくさ」等の内実について検討していくことが今後必要と思われる。また、質問紙において、勤務する施設に面接室、プレイルームがないと答えた協力者が6人いること、施設側から援助に必要な要員として位置づけられているかという問いに「あまり思わない」と答えた協力者が12人いること、心理職としての納得できる役割を果たしていると思うかという問いに「ほとんど思わない」「あまり思わない」と答えた協力者が47人いることなどもあわせて考える必要があり、解釈には慎重を要する。今回の質問紙調査では、生活に入ることのデメリットについての項目がないことも考慮すべきである。

一方、【(まだ) わからない、見いだせない】について記述している協力者は、経験年数が2年以下の者である。心理職として働くこと自体が初めてである協力者も少なくないことや、心理療法・セラピーのみを求められるなど施設側から期待される職務の内容などとの兼ね合いも考える必要がある。やりにくさを感じている協力者もいれば、生活に入ることについての有効性について考えるほどの時間生活に入っていない、そのためまだそのような関わりをもてていないという協力者もいる可能性がある。この点については施設になじむまでの時間も関係してくることである。

(2) 考察

①勤務年数による比較

それぞれの概念について勤務年数による質的な違いを分析した。【日常の子どもの様子を見ることで理解が深まる】は、1年目の協力者がほとんど記述していない(4人のみ記述)ということが大きな特徴としてありそうだが、それ以外はとりわけ大きな差はなく、勤務年数による差はみられない。ただ、経験を重ねるにつれ、理解が深まることと具体的な支援とのつながりが記述されているものが多くなっているという特徴はある。

【何気ない自然な関わりができる・生活場面面接】は、3年以下と4年以上では回答数は同数である。しかし、経験年数が短いほうが比較的「心理士として」「心理的なケア」というように専門職としての職業アイデンティティに関連した言及が多い。一方で勤務年数が長くなると、生活の中での営みに

ついでに記述が多くなり、子どもの体験世界に沿った関わりを行っていることを示唆する記述が比較的多く、また経験年数が長い協力者に生活場面でのその子どもの体験を広げようとする関わりなど、生活に沿った形で支援を広げているという印象をもつ記述がみられる。

【トラブルなどの介入】【子どもとの関係の構築】については記述した協力者は同数あり、特に質的な差は認められなかった。

【面接と生活の連続性の保証、広がりを促すことができる】についてもほぼ同数であったが、1年目の協力者による記述はなく、3年目以降の協力者が記述しているのが特徴である。これは心理職として業務を重ねる中で生活と面接の位置づけが次第に変化していっていることが予想され、勤務年数が長くなるにつれて施設の中での心理職としての動きが変わっていくことが示唆された。

【子どもと職員の間に入り関係を調整できる】については同数であり、質的にも目立った違いは認められなかった。【CWとの情報共有・連携強化・コンサルテーションにつながる】については、10人中8人が4年以上の勤務年数をもつ協力者であった。【心理士としての立場の確立】については、上に述べたとおりである。1年目から3年目の協力者の記述がほとんどを占める。逆に【施設職員としての機能】は4人中3人が4年以上の経験者であった。【外部との連携につなげることができる】は、特に違いは認められなかった。

②勤務形態の違いによる分析

生活場面で子どもに関わることの有効性については、本研究の協力者が、常勤74名、非常勤が26名というサンプルの偏りがある上での結果でもあり、数字自体の意味は慎重に考える必要がある。【生活場面面接、自然な関わりができる】【トラブルへの介入】【子どもとの関係の構築】【面接と生活の連続性の保証、広がりを促す】【子どもと職員の間に入り関係を調整できる】については、常勤の心理職による記述が多いという特徴が見られる。ただし、勤務形態の違いについては、勤務形態による勤務時間の長短という物理的な条件も見逃さない。

③全体的な傾向

心理職が生活で関わることの利点、またはそのような有効な関わりとして、心理療法・セラピー場面だけでなく、子どもの個人の課題・問題から他者との関係性に至るまで、さまざまな側面から子どもを把握できること、また子どもとの関係も職員との関係も深めることができ、調整役としても機能しやすい、職員とのコンサルテーションがしやすくなる、外部との連携ができるなど、援助の幅が広がるという利点があることが示された。

また子どもの生活に心理職が入ることで、子どもの生活世界に心理職が組み込まれること、その相互作用として、心理療法・セラピーが子どもの支援に入り込むことが比較的自然的に、無理なく行えるという利点もあるようである。

子どもの体験そのもの、子ども同士の関係、子どもと職員の関係、生活と心理面接との間など、さまざまな事象の間のつながりを促進していくのが、心理職が生活に入ることの利点の一つであると考

えることができる。

本節では生活場面での関わりの利点について、勤務形態による違いは見えにくかったが、勤務年数による違いは示唆された。経験が浅いと心理職として施設に入ること、なじむことから始めることになり、施設の中で心理職としてのアイデンティティをいかに確立していくかという課題がまず現れること、そして経験が長くなると比較的生活に入ることが自然になり、援助の一環としての心理職という意味合いでの関わりを行うようになるという傾向がみられた。

なお、本節で扱った内容には、「生活に入ることの利点」として一般化するには限界がある。本項目は、あらゆる場面について記述を求めたわけではないため、より一般的な理解をするためには、あらゆる場面について別々に訊くべきであった。

今回のアンケートでは、協力者の約8割が生活に入ることについて大切であると捉えたり、なんらかの有効感を持っており、またそのような場면을体験していた。しかし、生活に入ることについて、有効性を感じていない協力者が質問紙では2割近くいる。自由記述でも【やりにくい】が2人、【(まだ)わからない、見いだせない】が4人、無回答が22人いるという結果も慎重に考えねばならないだろう。心理職として施設の生活に入的过程中で、どのような体験が「やりにくさ」の認識をもたらしたのか、また生活に入ることによってどのようなことが子どもや職員にとってデメリットになっているのか、セラピー・心理療法と生活の関係を含め、援助者側の援助観・治療観とかね合わせ、具体的に検証していくことも今後の課題である。

(相澤 林太郎)

4-2 施設の心理職としてのやりがいや魅力

(1) KJ法による分類結果

やりがいや魅力に関しても、一人で複数の回答をしている場合があり、自由記述による回答は全部で113件得られた(表5)。

まず、大きくは、「A. 支援の対象に関すること」と「B. 支援の方法に関すること」の二つに分けることができた(図10)。

「A. 支援の対象に関すること」とは、“援助の対象”にまつわる魅力である。これは、自由記述における力点の置き方から、さらに以下の5つに分類可能であった。一つ目は【児童福祉領域ならではの対象】を強調しているもので、「年齢幅が大きい」「外来の相談機関では出会えないであろう人、会い続けるのが困難であろう人と出会うことができる」などが挙げられている。二つ目は【子どもとの関係の深まり】を述べたもので、「子どもから信頼されていると実感できる時、やりがいが感じられた」「子どもと一緒に信頼関係を作っていく過程に魅力を感じる」などが挙げられた。三つ目は、対象が施設に入所している子どもであるがゆえに、【長期間じっくり関われる】というもので、この“長期間、じっくり”という点に力点が置かれている。「子どもの成長を長いスパンで見守ることができることが一番嬉しい」「子どもの成長、発達過程にじっくりつきあうことができる場所」などが挙げられた。

表5 施設の心理職としてのやりがいや魅力（数字は回答数）

概念名	勤務年数		勤務形態		総数
	1～3年	4年以上	常勤	非常勤	
【児童福祉領域ならでの対象】	2	1	1	2	3
【子どもとの関係の深まり】	1	3	2	2	4
【長期間じっくり関われる】	2	3	4	1	5
【子どもという存在自体】	7	2	3	6	9
【子どもの変化・成長】	9	12	16	5	21
【心理面接・心理職独自の関わり】	15	5	15	5	20
【生活に近い】	18	13	28	3	31
【チームアプローチ】	7	8	11	4	15
【多角的アプローチ】	2	1	2	1	3
【その他】	1	1	2	0	2

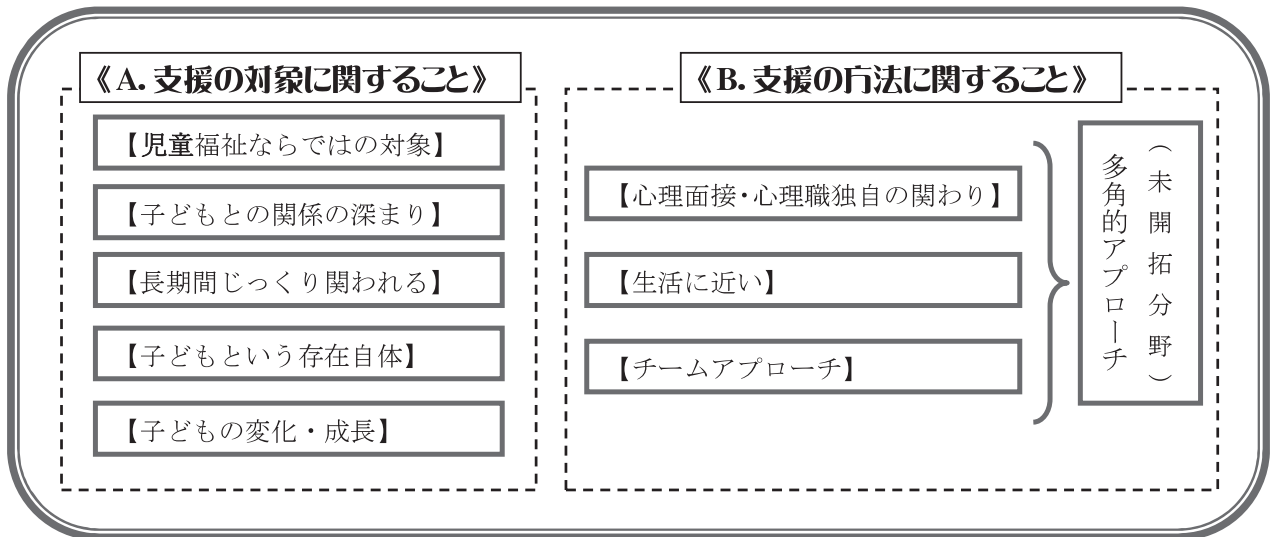


図10 「施設の心理職としてのやりがいや魅力」概念間の関係

四つ目は【子どもという存在自体】への魅力と言えるもので、「子どもの心の深いところにかかわることで、人間の可能性・すばらしさに気づくことができる」「駆け引きや損得勘定なしに、良くも悪くもあるままの姿(心)でかかわってくれるところ」などが挙げられている。一方、五つ目は【成長・変化】自体に力点を置いて言及されているものである。先述の【長期間じっくり関われる】も成長・変化に言及されているが、それはあくまで関わりが“じっくり、長期に亘る”ところに力点が置かれていた。この力点の違いにより、違う分類にした。「子どもがどんな小さな課題でもクリアできたとき」「子どもが、子どもらしく素直に変化したとき、自信に満ちた落ち着いた表情になっていくとき、嬉しい」等の記述が見られた。

「B. 支援の方法に関すること」は“援助やアプローチのあり方”にまつわる魅力である。これは4つに分類できた。一つ目は、【心理面接・心理職独自の関わり】で、具体的な記述としては「心理場

面で生活場面とは違う一面を子どもが見せた時」「問題行動ばかりおこす子どもに対して、ケアワーカーがネガティブな感情ばかりを口にするようになってしまった状況においても客観的にとらえることができる」ところ」などが挙げられた。二つ目は【生活に近い】ことがもたらす魅力について述べたものである。この中には、子どもの成長や変化が述べられている点で【子どもの変化・成長】と類似しているものもあったが、「直接」「直に」援助的な関わりや観察が可能であるという点に記述の比重があると思われたものは区別し、分類した。「心理面接の中での成長を把握しながら、生活場面での成長、変化を見ることができる」「子どもの成長を実感しやすく、個別的な関わりを行なううえでもその子についての情報を把握しやすい」などがこれにあたる。三つ目は他職種・他機関協働の【チームアプローチ】について言及されたもので、「担当職員や他職種の職員や関係機関とチームとして力を合わせ、子どもの一人ひとりの自立に向けて支援していくことができること」「子どもへの支援について他の職員と連携して行うことができ、それによって子どもの状態が落ち着いていくのを見ることができたとき」などが挙げられる。また、以上の三つを総合したとも言える、児童福祉施設ならではの支援（の可能性）に言及したものが【多角的アプローチ】である。「働き方、心理面接の内容などに工夫のしがいがあるところ」「子どもに対して多角的に援助できる可能性のあるところ。心理職が個別に直接援助できることもあれば、間接的にチームワークを組んで援助できることもあり、子どもにも、子どもを取り囲む環境にも援助することが可能なところとを感じる」などの記述が見られた。ここには、この分野における心理臨床的援助が未開拓で、今後の展開・発展への可能性に言及したのも含まれる。

その他、「やりづらさしかない。指導員としての立場のときに生きがいを感じてしまう」「魅力を感じ就職したが、今はうまく説明できない」など、「魅力ややりがい」を尋ねた質問項目にもかかわらず、それをもち得ない苦しさや垣間見える回答も2つあった。

(2) 考察

①経験年数による比較

【心理面接・心理職独自の関わり】について、経験年数で差が見られた。【心理面接・心理職独自の関わり】の回答数は、全体の中では第3位（20回答、18%）であったが、経験年数3年以下と4年以上で区切ると、20回答のうち15は3年以下であり、4年以上は5となった。3年以下の人も【生活に近い】や【チームアプローチ】に言及する頻度は高いが、心理職としてのアイデンティティや意識内に占める業務の比重で多くを占めるのは「個別の心理療法」ということになるのであろう。

では、経験年数を経たものは「個別の心理療法」に魅力ややりがいを感じなくなるのかということ、おそらくそうではないと思われる。前述したように、業務時間で言えば、個別面接を行なう量が多いのは4年以上の職員の方であり、これは「納得できる役割を果たしている」との回答とも相関がある。ここから推測するに、経験年数を経るに従って、「心理療法」は子どもの変化・成長やチームアプローチのための“手段の一つ”として相対化される度合いが大きくなるのではないだろうか。すなわち、「心理療法」それ自体を単体としてやりがいと思うというよりも、それを通して最終的なゴールである「子

どもの変化・成長」や「チームとの協働」に参加する、という位置づけがなされるようになって考えられる。それゆえ、自由記述としてことさらに言及されることが低下してくるのではないかと思われる。

②勤務形態による比較

勤務形態による比較では【生活に近い】ことへの魅力の言及で差が見られた。【生活に近い】は全体の中では第1位（31回答）であったが、このほとんどは常勤職による言及（28回答）であり、非常勤の人でこれを挙げたのはわずか（3回答）であった。この項目は経験年数による差は見られないので、常勤・非常勤という勤務条件・勤務形態に大きく影響を受けることがうかがわれた。

おそらく非常勤で雇用されている人は「子どもと個別面接をする人」という明確な位置づけがあり、実際の勤務時間もこれでほぼ占められている場合が多いのであろう（実際、非常勤の中では【心理療法・心理職独自の関わり】への回答は第1位である）。生活場面への直接的な介入は、する機会が相対的に少ないために、そこから得られる魅力ややりがいも自由記述で表現するほどまでには感じにくい、ということが想像される。

これに対し、常勤職は【生活に近い】【心理療法・心理職独自の関わり】共に言及が多い（常勤職の中での回答数はそれぞれ28と15、第1位と第3位）。従来、児童養護施設の心理職をめぐる議論の中では、「生活の中での心理療法の難しさ」が取り沙汰されることが多かったが、こと常勤職に関して言えば、「生活」と「個別面接」双方を意義あるものとして積極的にとらえていることがうかがわれた。

③全体的な傾向

以上のような差異は見られるものの、全体的な傾向としては、「児童養護施設ならではの」の点に魅力を見出していると言える。全体として回答数が高いのは、順に、【生活に近い】（31回答、27%）、【子どもの成長・変化】（21回答、19%）、【心理療法・心理職独自の関わり】（20回答、18%）、【チームアプローチ】（15回答、13%）などであった。

これらはいずれも「児童養護施設」という“場の特質”に根ざした魅力ややりがいといえるだろう。直接的な観察や介入という「空間性」（【生活に近い】）、試行錯誤を共にする中での子どもの成長・変化という「時間性」（【子どもの変化・成長】）、他職種との協働という「共同作業性」（【チームアプローチ】）などは「児童養護施設ならではの」の面であり、従事している心理職もこの点をしっかり魅力として押さえていることがうかがわれた。【心理療法・心理職独自の関わり】に言及した人も、「他職種がいる中での心理職独自の役割・個別面接」「施設に入ってくるような大きな課題を抱えた子どもへのセラピー」にやりがいを感じている記述が認められ、施設という“場の特質”を踏まえていることがうかがわれた。特に、【子どもの変化・成長】や【チームアプローチ】については、常勤・非常勤や経験年数によらず、平均して高い頻度で言及されていた。

(内海 新祐)

4-3 施設の心理職として困難に感じること

(1) KJ法による分類結果

困難さの自由記述に関しては、無回答～1人で4つの概念を含む記述を行っている協力者まで、その回答の仕方や内容が非常に多岐に渡って記されていたことを先に述べておく。

自由記述による回答では157の回答が得られた。以下に、その分類を記す（表6）。

表6 施設の心理職として困難に感じること

概念	度数	勤務年数			勤務形態	
		～3年	4年～	平均年数※	常勤	非常勤
【生活関与に伴うこと】	26	17	9	2.92	20	6
【一人職場】	13	7	6	2.85	12	1
【施設文化】	5	2	3	4.8	3	2
【無力感】	6	2	4	5	3	3
【心理－生活の連動性】	3	1	2	4	3	0
【研修】	4	2	2	3	4	0
【福祉システムの限界】	4	3	1	2	1	3
【セラピーに関して】	11	9	2	2	10	1
【情報】	7	6	1	2.71	4	3
【ケアワーカーとの関係】	30	19	11	3.17	19	11
【心理職への理解】	19	10	9	3.26	14	5
【子どもの支援】	9	5	4	4.11	4	5
【待遇】	15	8	7	3.87	11	4
【特になし】	5	2	3	4.8	5	0

※表中の「平均年数」は本節の分析においてのみ扱ったものである。

【生活関与に伴うこと】

「生活場面に入ることによるセラピーへの影響」、「暴力や性行動への対応」、「指導場面」、「生活での関わり方」、「生活とセラピーの切り替えをどうするか」（回答数23）、「個人の課題を集団でどう扱うか」、「集団生活と心理の個別性が対照的であること」（回答数3）を分類した。

【一人職場】

「孤立しやすい」、「同じ職種に相談ができない」、「客観性の維持」、「一人職場の負担感」（回答数13）を分類した。

【施設文化】

「施設の閉鎖的な環境」、「施設文化の打開できなさ」、「施設に巻き込まれないようにすること」（回答数5）を分類した。

【無力感】

「長年の援助の実らなさ」、「子どもの行動に無力感を感じる」、「職員に対する無力感」（回答数6）

を分類した。

【心理－生活の連動性】

「生活とセラピーをつなげていくこと」(回答数3)を分類した。

【研修】

「自分のスキルを磨くこと」、「施設内研修の内容や新人教育」(回答数4)を分類した。

【福祉システムの限界】

「外部機関との連携」、「福祉システムの課題」(回答数4)を分類した。

【セラピーに関して】

「子どもの面接」、「見立てと終結」、「セラピーに来ることが困難な子どもへの対応」(回答数4)、「セラピーの枠の設定や維持、確保」、「セラピー対象の子どもが多く担当しきれない枠の限界」(回答数7)を分類した。

【情報】

「情報共有の仕方や施設内のことを把握すること」(回答数3)、「情報の混乱や少なさ」(回答数4)を分類した。

【ケアワーカーとの関係】

「ケアワーカーとの連携にまつわる守秘義務や共通理解、協働」(回答数18)、「ケアワーカーへのコンサルテーション」、「関係調整」(回答数4)、「ケアワーカーとのコミュニケーション」、「共通言語で伝える伝え方」(回答数4)、「チームワーク」、「ケアワーカーの辞職によるチームの作りなおし」(回答数4)を分類した。

【心理職への理解】

「他職種から心理療法や職務について理解を得ること」、「心理職への過大な期待と偏見」(回答数10)、「人手不足による生活への介入」、「生活重視の為に心理療法が継続できない」、「役割が定まっていない」、「心理職のアイデンティティを保つこと」(回答数9)などを分類した。

【子どもの支援】

「子どもとの距離の取り方や愛着形成の難しさ」(回答数2)、「親や関係機関の影響から、必ずしも子ども中心の支援にならない」、「ケアの焦点が不明確」(回答数3)、「長期入所児童や自立、アフターケア、家族や親への働きかけの難しさ」(回答数4)を分類した。

【待遇】

「給与や休暇などの待遇に関すること」、「勤務時間が遅くなること」、「時間で区切って働くことの難しさ」(回答数7)、「オーバーワーク」、「記録の多さ」(回答数6)、「会議への参加の少なさなど施設内での働きに関する難しさ」(回答数2)を分類した。

【特になし】

「特になし」(回答数2)、「無回答」(回答数3)を分類した。

(2) 考察

①経験年数による比較

上記の概念を経験年数で分類してみた結果【施設文化】【無力感】【研修】は2年目以降に回答されている。【施設文化】については施設独自のルールや、施設の持つ人間関係、文化を理解した上で、その文化に対する疑問や行き詰まりを感じるという内容の回答が多く、心理職として働き始めた初期の頃に困難さとして感じやすいようであった。【無力感】に関しては、長期間の関わりの結果「結局こうになってしまうのか」という思いをすることや、継続した関わりがあっても成長が見られない子どもから喚起される内容の回答が多く、長期的に子どもを支援する中で生じやすい概念と考えられる。加えて、家族の影響により子どもの成長が妨げられることも無力感の回答の中に見られた。【研修】は、心理職としての専門性を磨くことと、施設内で職員に対して行う研修とに二分された。職員への心理的アプローチや研修の質を高める必要性を感じている回答も見られた。続いて、【心理－生活の連動性】では3年目以降の経験者より回答が得られた。この概念は、生活場面と心理療法をうまく連動させていくことに関心が向けられており、児童養護施設の心理的支援のあり方として、心理療法のみでなく生活支援の重要性にも意識が向けられた内容になっている。

経験年数があまり影響していない概念として【ケアワーカーとの関係】【心理職への理解】【待遇】が挙げられる。【ケアワーカーとの関係】は、今回の調査の中で最も回答数が多く、内容も多岐に亘っている。例えば、「職員とのコミュニケーション」という単純な回答から「ケアワーカーの怒りに巻き込まれ、客観的なスタンスでいることの難しさ」や「職員間の関係の悪さを見ていること」「職員の入れ替わり」など、常に関わるケアワーカーとの関係は、年数を経れば当然のように関係の質が変化していくため、それに伴い困難に感じる部分も変化していくと思われる。【待遇】に関しては、「記録の時間がとれない」や「やるべきことの多さ」「やろうと思えば仕事が際限なく増えていく」という回答から、実質的な時間のなさ、業務の多さはもちろん、施設の心理職としての仕事内容が各施設でそれぞれ未開拓であり、その可能性の広さから仕事量が個人の裁量に影響されやすいということが考えられる。

②勤務形態による比較

常勤、非常勤の勤務形態で分析した結果、【心理－生活の連動性】【研修の概念】は非常勤に回答が見られなかった。また、【セラピーに関して】の概念で困難さを感じていると答えた非常勤は1名のみで、非常勤の方が業務＝心理療法という働きが明確であり、構造の確保や枠の限界などで困難さを感じる傾向が少ないことが予想される。これと関連して【心理－生活の連動性】は先の経験年数による分析でも述べた通り、生活支援の重要性や連動に意識が向けられた内容であり、常勤の心理職の方が心理療法に留まらず、子どもの生活全般に関心が向けられていることが推測される。【研修】に関しては、自分自身の研修に加えて職場の研修に関する困難さが回答されており、常勤の心理職の方が施設全体に意識が向きやすいためだと考えられる。

【一人職場の困難さ】を回答したのは非常勤では1名のみであった。常勤の方が他職種との関係の

中に長時間身を置くことで、「孤立感」や「心理に関する相談相手がいない」「一人よがりになりがち」ということに困難さを引き起こしやすい状態と考えられるだろう。

③全体的な傾向

困難さの概念と平均年数の関係を図11に示した。その特徴として、経験年数が少ない方が施設の中で自分の役割をどう確立していくかということにまつわる困難さを挙げていることがわかる。特に、【生活関与に伴うこと】の概念では「生活場面にどの程度直接関わっていくか」や「面接時と生活時の切り替え」など、生活支援に携わることにより心理療法を実施している子どもへの影響を不安に感じている意見や、自分自身が生活場面に関わることで子どもとの距離感や関係に混乱を感じる意見、また心理職としての役割を曖昧に感じ、どの程度生活に介入するかという意見が多く見られた。【セラピーに関して】では、セラピー終結のタイミングや見立ての困難さが意見として上がる一方で、施設内に面接構造を定着させることや生活優先でセラピーの時間がとりにくいことなどが挙げられた。一方で、平均経験年数が上がるにつれて困難さの概念には【無力感】【施設文化】【子どもの支援】【生活－心理の連動性】が挙げられており、これは経験年数を重ねるにつれて、個別心理療法に固執せず、施設全体に視野が広がった状態で子どもの支援を考える意識が生まれてくると言えるだろう。つまり、施設の心理職として働き始めた頃には、個別心理療法を自分の仕事の中心として捉え、セラピーや子どもとの関わりが悩みや困難さの中核になりやすい傾向があるが、年数を重ねることにより、セラピー以外の観点から子どもの支援に困難さを感じるようになっていたり、セラピーだけでなく生活支援の重要

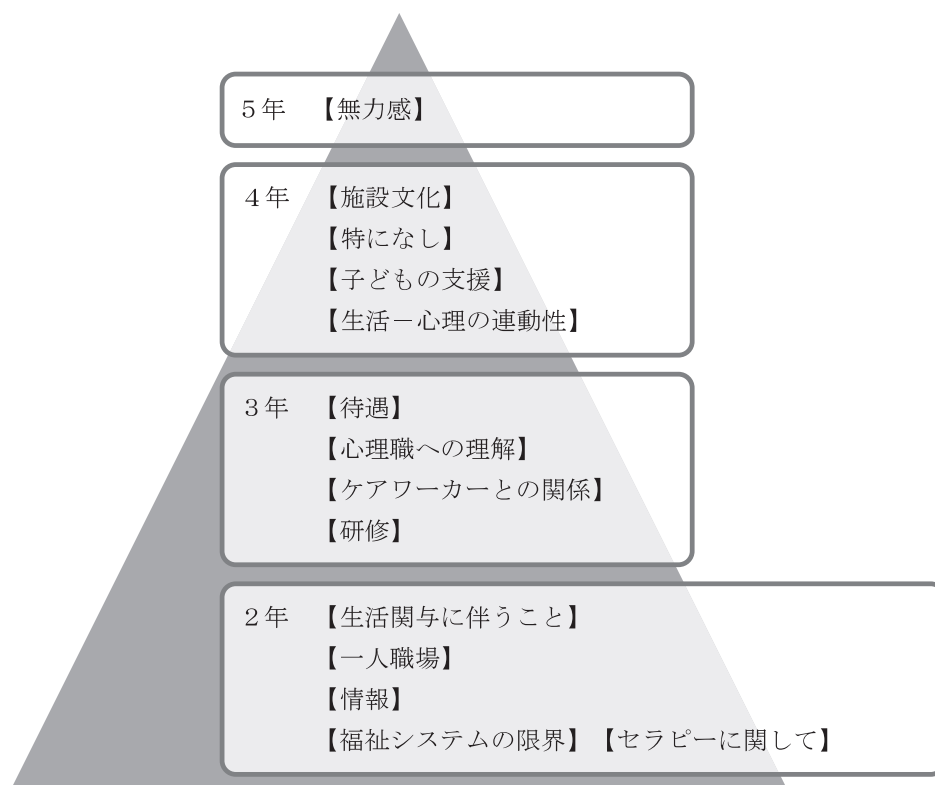


図11 困難さの概念と平均経験年数の関係

性を認識してそのつながりを意識するように変化していくと考えられる。

また、職員との関係という観点から検討すると、心理職としての初期の段階では施設の職員集団に心理職自身がどう馴染むか、具体的にはどう子どもの情報を得るか、伝えるかということや、セラピーへの理解をどう得ていくかということに困難さを感じやすく、孤立感も喚起されやすいようである。そこから経験を重ねるにつれ、職員との基本的なコミュニケーションに関する困難さから、コミュニケーションの質や良い連携、協働にまつわる困難さに変化していくと推察された。同時に、経験年数を重ねることで、自分の所属している施設の文化や集団の特性を理解し始め、その施設集団の中で自分が心理職としてどう機能していくかが困難さと結びついてくる。

最後に、困難さの平均経験年数のもっとも高かった概念は【無力感】であった。これは、子どもに長期間関わることで、子どもの成長も感じられる一方、長く関わっても変化の感じられないことによる心理職側の傷つきや、家族支援の不十分さから親の影響から逃れられない子どもを目の当たりにすることで、年数を重ねれば重ねるほど自分たちの無力感を喚起させられる機会を多く経験するためと考えられる。加えて、ケアワーカーの退職により、子どもを支援していく上で支え合っていたチームや職員の間関係が最初から作りなおしになることも無力感を感じる要因として挙げられていた。したがって、施設全体としても心理職のメンタルヘルスに目を向け、長期的に心理職を支えていくことが重要であると思われる。同時に、ベテランの心理職であっても、自身の疲れや傷つきを自覚し、それを発散したり回復させる術を身につけていくことが大切であろう。

(杉山 史恵)

4-4 心理職が養育・支援を担うチームの一員として機能するために大切なこと

(1) KJ法による分類結果

自由記述による回答を、7つのカテゴリーに分類し、それぞれの回答数を経験年数別、勤務形態別に集計した表を表7、概念の関係性を図12に示した。回答数は全部で138であった。以下に分類された概念について記す。

【心理職が専門性を発揮し役立たせること】に分類したのは「心理士としての見立てを明確にし、それを分かりやすく他の職員に伝えること」といった記述で、心理職がその役割を果たして実践的に機能していくことを重視した記述を分類している。

【情報の共有やコミュニケーションを重視し、連携がスムーズにいくようにすること】は、連携機能がスムーズにはたらくためのチームの成員とのコミュニケーションを重視した記述を分類している。「他職種の職員とコミュニケーションをとり、良い関係を作ること」や「他職種との連携、サポート体制」というような記述がここに分類されている。この概念に言及した記述は全体的に特に多く見られ、他に分類された概念と併記されることも多かった。

【職種にとらわれないはたらきへの関与】は心理職という枠にとらわれずに、その場に応じて必要なはたらきに関与していくことを重視した「フットワークを軽くし、心理という枠のみで動かない」というような記述を分類している。

【心理職の役割の認知】は心理職がどのような役割や機能を果たす職種なのかということ了他職種に認知してもらうことを重視した「心理職が何をしているか、何をしたいか、わかってもらうのを待つのではなく、こちらから伝えていくようにすること」などの記述を分類している。

【施設の文化や他職種のはたらきを理解しようと努めること】は施設という環境のもつ文化や他職種のはたらきを理解し、受け入れることを重視した「施設の風土や人間関係を良く見極め、振る舞い方、自分のとるべき役割を決めること」や「分かろう、聞こうという姿勢をみせ続けること」などの記述を分類している。

【専門性の相互理解】は心理職とその他の職種がそれぞれの違いをお互いに理解し合うことが重要と感じている「お互いの専門性を理解し、尊重しながら協力していくこと」などの記述を分類している。

【人間性の重視に関すること】は職業などの枠組みよりも個人的な人間性を重視した「人として信頼されること」などの記述を分類している。

これらの分類の構成であるが、【心理職が専門性を発揮し役立たせること】と【心理職の役割の認知】は心理職という職業の果たすべき役割の認知に努めたり、その役割を果たすというチームで機能していくことに重点をおいているということで近い概念ではないかと思われる。一方で【職種にとらわれないはたらきへの関与】と【施設の文化や他職種のはたらきを理解しようと努めること】は職種にこだわらずにチームの全体性への関与に重点をおいているということで、近い概念ではないかと考える。そして【専門性の違いの相互理解】はこの【心理職が専門性を発揮し役立たせること】【心理職の役割の認知】と【職種にとらわれないはたらきへの関与】【施設の文化や他職種のはたらきを理解しようと努めること】の両者ともにバランス良く行われることに重点をおいているという折衷的な意見だと思われる。【情報の共有やコミュニケーションを重視し、連携がスムーズにいくようにすること】については、他の概念と併記されることも多く、職種に言及していないということもあり、チームとしてはたらく上では、職種に限らずに前提となる概念ではないかと思われた。【人間性の重視に関すること】についても職種には言及していないが、こちらはチームとしてはたらくにも限定されないような、対人援助の分野ではたらく上で下地としてもっていることが望ましい特性について述べられた概念のように思われた。

表7 経験年数別、勤務形態別の回答数

概念名	勤務年数		勤務形態		総数
	1～3年	4年以上	常勤	非常勤	
【心理職が専門性を発揮し役立たせること】	8	10	4	14	18
【情報の共有やコミュニケーションを重視し、連携がスムーズにいくようにすること】	33	15	10	38	48
【職種にとらわれないはたらきへの関与】	5	5	4	6	10
【心理職の役割の認知】	10	10	4	16	20
【施設の文化や他職種のはたらきを理解しようと努めること】	5	8	3	10	13
【専門性の違いの相互理解】	6	3	3	6	9
【人間性の重視に関すること】	4	5	1	8	9
【その他（無回答を含む）】	6	5	2	9	11

表7のデータから見てくる結果としては、経験年数3年以下と4年以上で比較したところ、【心理職が専門性を発揮し役立たせること】と【施設の文化や他職種のはたらきを理解しようと努めること】が経験年数の多い人に重視されやすく、【情報の共有やコミュニケーションを重視し、連携がスムーズにいくようにすること】が経験の浅い人に重視されやすい傾向が見られた。

また、常勤の人が【情報の共有やコミュニケーションを重視し、連携がスムーズにいくようにすること】と【心理職の役割の認知】と【人間性の重視に関すること】を比較的重視し、非常勤の人は【職種にとらわれないはたらきへの関与】を重視する割合が多かった。

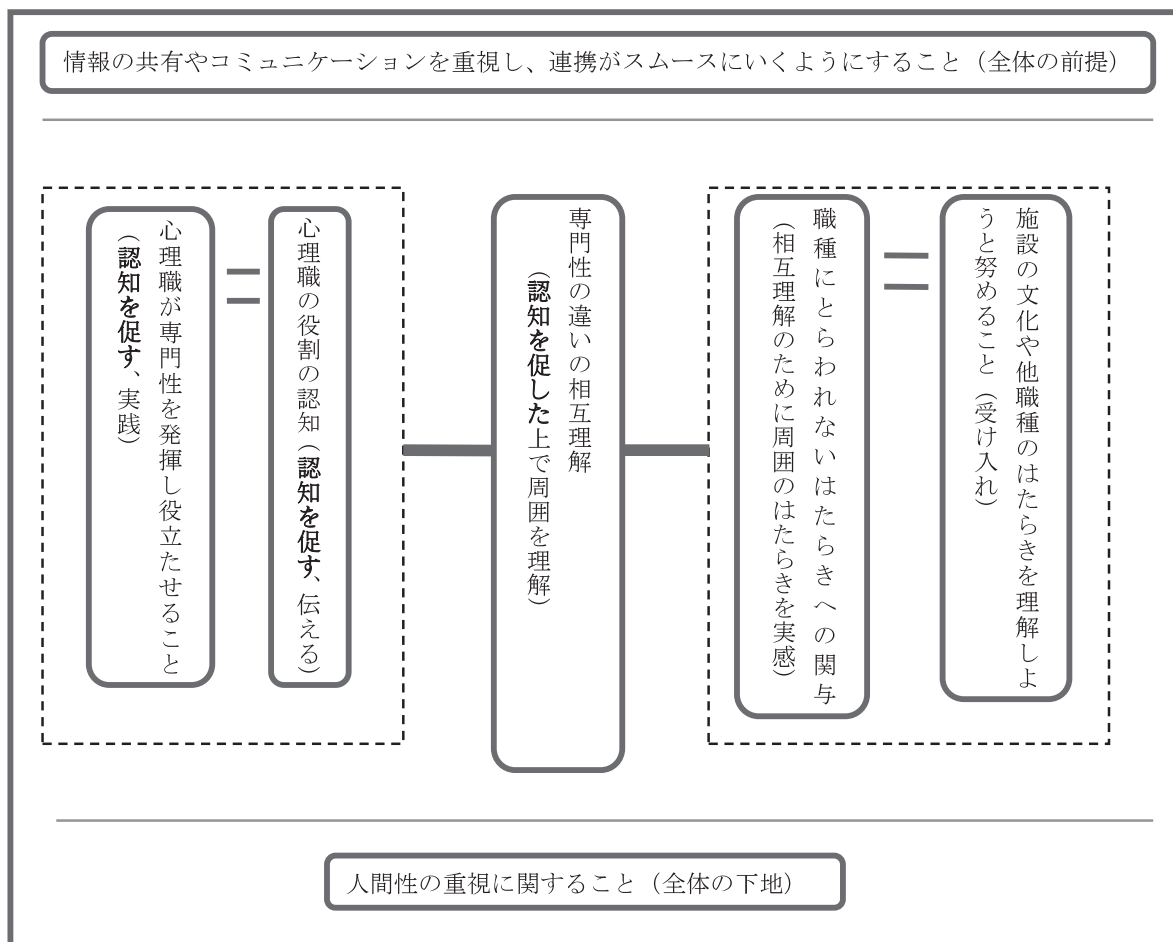


図12 概念同士の関係性

(2) 考察

①勤務年数による比較

これらの結果を踏まえて考察していくと、経験年数の浅い人は、まずチームの一員として認めもらうためチームの成員との関係形成を重視して、コミュニケーションをとることに努力をするのではないだろうか。経験が長くなってくると、チームの成員としての位置はできあがり、関係形成やコミュニケーションは前提となって、より「はたらき」の部分に意識が向くのではないかと考えられる。つまり、チームの中で自分の立ち位置の成熟度がここでの意識の差となって表れやすくなっているの

はないだろうか。具体的には、チームに入ったばかりの時は他のチーム成員に対する気遣いに意識がとられやすく、その気遣いとらわれる必要がないくらいチームに順応した時に、意識のほとんどを援助対象に向けることができると考えられる。

②勤務形態による比較

勤務形態別に見た結果からは、非常勤で働く人が職種にとらわれないはたらきへの関与を多く挙げたことは、施設の中で役割が限定されやすい立場上、チームとしてはたらくにはその役割を超えるようなはたらきの必要性を感じているということではないかと考えられる。逆に常勤で働く人は、心理職という業務上の職種はあるものの、一施設職員としてはたらしも求められるので、そこに飲み込まれて自分の役割を見失わないという視点が必要となり、心理職の役割の認知が上位にきたのだろうと推測された。また、常勤でコミュニケーションの重視と連携、人間性の重視というところに力点を置いた人が多く見られたのは、これらは人が援助機関という組織の中ではたらく上では基礎として必要なものと想定されるので、心理職というよりは援助職や組織の一員ということを意識した結果の記述ではないかと思われ、それだけチームに対する帰属意識の高さもあるのではないかと考えられる。ここには心理職としてはたらしと専門家として主張しすぎないことのバランス感覚の重要性も示唆されていると考えられる。これは今後、援助機関におけるチームの一員として心理職が定着してはたらくために備えるべき態度として扱われる可能性が高いのではないだろうか。

③全体的考察

全体を通してしてみると、抽出された個々の要素は、お互いに関連した内容だと言えるのではないだろうか。例えば、心理的視点から見えてくる子どもの状態を伝えるためには、施設の文化や他職種のはたらきを理解し、伝わる言葉や腑に落ちる伝え方を工夫し身につけていかねばならないだろう。そのためには信頼されるにふさわしい人間性を備える必要もあるだろうし、お互いを知るためのコミュニケーションを図る必要性も感じることになるだろう。どのスポットに焦点を当てているかが回答の違いとなって表れていたと感じる。またここでは勤務形態の違いと経験年数の長短で差を検討してきたが、環境や状況（施設形態、組織の人員構成、心理に対する理解度、男女差など）も回答に影響を与えると予測される。

(古谷 みどり)

IV. まとめ

2000年の子ども虐待防止法制定以降、社会的養護においては虐待を受けた子どもの入所が増加し、児童養護施設では半数を超えている状況である。こうしたケースの抱えた問題は複雑で、対応は困難を極めている。2009年度に児童相談所で扱った年間約4万4千件の子ども虐待ケースの内、家族から分離されて社会的養護の対象になるのは1割弱である。分離の理由は生死にかかわる、あるいは家族との同居が心身に重大な悪影響を及ぼす可能性が大きいからである。こうした子ども達は、人生の早期から劣悪な環境を生き抜き、それゆえに心的発達に歪みが生じている、誤った行動を身につけている、外傷体験や喪失体験の後遺症を持つ、身体の発育や機能にも問題を抱える、などといった特徴がある。人格の基底部分に問題を抱えているという意味では、学校のスクールカウンセラーや外来相談機関に比べ、施設の心理職が扱うケースはより重症なケースが多いということができよう。施設の心理職にとってこうしたケースと向き合うことは応用問題を解くようなもので、たとえ経験のある臨床家であったとしても難題となる。

施設に入所して被虐待児に有効な心理治療のあり方、あるいはこうしたケースを抱える施設の心理職がどうあるべきかの明確な回答はなく、実践の中での試行錯誤と論議が続いている段階でもある。こうした展開の中で、大学やクリニック等に所属する外部の臨床家が、よって立つ理論や価値観、技法上の諸条件等から施設心理職のあるべき姿を主張し合っているようにも見えるときがある。また外来ケース中心に展開された多くの治療モデルを、生活臨床の場にそのまま持ち込む心理臨床家も少なくない。滝川（1990）は、情緒障害児短期治療施設の心理治療のあり方を述べる中で、施設で治療を必要とするケースは、前エディプス段階、つまり「二者関係」に躓きのある子どもには、神経症治療由来のオーソドックスな個人心理治療を用いるだけでは十分でなく、生活も含めた大きな治療的構造と手立ての必要性があると述べている。このことは被虐待児の入所が増加した現在の児童養護施設でも当てはまる指摘である。重要なのは施設生活の場に心理機能を組み入れることの意味やあり方を、ケースの実情に即して施設臨床現場の中から導き出すことである。それは対象となる子どもたちや家族、そして共に携わる職員の声に耳を傾けることであり、現場で実践する心理臨床家の経験と実感が重要となろう。本研究が、施設心理職の経験年数を重視し、彼らが体験してきた実感に焦点を当てたのは、心理職の配置が始まって10年以上たった今、積み上げられつつある貴重な知見に学ぶためである。分析の結果では、経験年数を重ねた心理職は、施設における心理治療への考え方や姿勢、心理職としてのあり方について、経験の浅い心理職と比較して重要な差異があることが示唆された。

以下がそのまとめである。

① 児童養護施設の心理職ならではのやりがいや魅力について、多くの心理職が生活に近く、子どもの成長に長期にわたって寄り添えることの利点を強調しており、個人心理治療や心理職独自の関わりに限定した言及は、経験の浅い心理職や非常勤の心理職に多い。個別心理療法は、その重要性は変わらないものの、施設全体の臨床の中で、子どもの回復と育ちを促す一つ的手段として相対化されていくと考えられる。より重要なのは生活に近いことにあり、具体的には、職員との情報交換やコンサ

ルテーション、施設カンファレンスや会議への参加、生活場面面接、担当以外の子どもの情報等多岐にわたる情報を把握できること等である。

② 施設心理職のやりがいや魅力の一つに、生活に近いことがあげられる。生活の様子が把握しやすく、子どもの理解に有益なことと、治療的支援がすぐに生活臨床に反映され、その変化を直接把握できるなどである。一方経験を積む中で施設チームの一員として受け入れられ、施設職員と情報交換が盛んになることは、施設に貢献できているとの実感が高まり、これは心理職のリジリエンスに通じる重要な要素であろう。

③ 協力者の71%が生活場面での関わりについて有効であったと感じている。経験の長い職員ほど「日常の子どもの様子を見ることで理解が深まる」と述べている。また子どもの生活体験を共有することで、心理職と子どもとの関係の構築、パニックやトラブル等の子どもの状態や施設職員と子どもとの関係調整等、子どもの回復と育ちに有効な直接的な手立てが取れることやコンサルテーションのしやすさといった利点を感じている。一方で、生活場面で子どもに関わることに、有効であったと回答してない協力者が2割いることから、有効性を感じないことの中身を検討していくことも今後の課題である。

④ 心理職として困難に感じることに、経験の浅い心理職は、自分の役割をどう確立するか、セラピーをどう位置づけ実施するかといった、いわば心理職固有の困難さに関心が向いているが、経験者は、チームアプローチのあり方、施設文化、施設生活の中での子どもの支援等、施設全体が抱える課題や困難さに向き合うようになる。関心の中心が心理臨床家としての自分から、施設や子どもへと移行していくのが分かる。経験の長い心理職が感じる無力感や、子ども自身や施設職員の無力感や絶望感の反映でもあり、真に施設と子どものニーズと向き合った結果ともいえよう。

⑤ 生活を重視し、治療的手立てと生活が統合されるためにはチームアプローチが前提で、心理職がチームの一員として機能する必要がある。そのために経験の浅い心理職は、チームの一員として認めもらうために、職員との関係形成に重点を置く。常勤で、かつ経験の長い心理職は、人間性の重視など、自分自身のあり様を深くとらえるようになると同時に、チームの中への位置づけは前提となり、より臨床的な目的の中、チーム全体がどうあるかを考えるようになる。

以上が施設で臨床を行う心理職の実感のまとめである。特に生活と連動することの重要性が目される。生活の場に心理的治療機能が位置づけられるメリットとして、日常生活の様子が把握できるなど、子どもの理解に有益な情報が、多岐にわたって豊富に得られることと、生活場面への治療的な手立ての設定や関わる職員へのコンサルテーションが容易であるという点が挙げられる。本調査では、多くの協力者がこのメリットを実感している。治療機能が生活の中に統合されることで、治療的アプローチの手立てや可能性の幅は大きく広がることになる。一方、視点を個人心理治療に限定すれば、従来の心理治療を展開することのやりにくさや、治療技法の約束事を守れないなどの課題が浮き彫りになり、このことが施設心理職における大きな課題として意識されている。経験が長くなることで、こうした問題は複数ある課題の一つとして、相対的には小さな問題となり、むしろ生活に近いことのメリットの方に価値を置く傾向が強まると考える。

こうした職員の感覚は貴重なエビデンスとして無視できない。施設心理臨床のあり方は、個人心理治療をどのように行うかよりも、生活を組み入れた施設全体の治療的機能をどのように考え、そこで担う心理職の役割は何かを追及することから生まれるということである。これを目指すことが、施設で働いてきた施設心理職の実感に即した方向性といえよう。

したがって今後の研究課題は、次のようになる。

- ① 生活を組み入れた施設全体の治療的機能の明確化、施設全体の治療的構造と具体的な手立ての構築
- ② 施設全体の治療的機能における心理職の役割の明確化

滝川（1990, 2004）は、日常の場にあらゆる精神療法の原型があり、一般に人々が悩みや相談ごとに処するときのいろいろな知恵が「技法」として磨きをかけ、抽象化させたものが精神療法であると述べている。施設臨床の現場は、生活場面も含めて、さまざまな場面で子どもと家族の苦悩、生きづらさ、悩みに対応している。そこに心理職も加わって、さまざまな知恵と手立てを駆使している。滝川の指摘に即してみれば、これらの一つ一つが治療的あるいはその原型と言ってよいだろう。だとすれば施設全体の治療機能を明確化するためには、こうした日々積み上げられている実践の中から、有効な治療的手立てをケースの課題やニーズに合わせて整理し、施設独自の治療的技術としてあらわしていくことであろう。滝川が指摘した数々の精神療法の成り立ちに認められる、日常的で具体的なやり取りの抽象化という過程を、施設という場で展開することである。このことはもはや施設心理職の役割の一つの重要な側面といってよいように思う。現場の臨床家こそ、ケースの課題やニーズを把握できる一番手であり、何が求められるかを考えられる適所にいる。これまでが、既存の心理療法や治療プログラムの取り入れ（時に不用心な一方的取入れもある）の時代であったとしたら、心理職が導入され、10年以上の経験を経た現在、独自の治療的手立てを整理し、磨き上げ、外に示す段階にきているのではなかろうか。その過程の中で、個人心理治療のあり方さえも、それまでの治療的枠組みや構造と違った、社会的養護ケースの課題やニーズに適した、施設独自のそれが生み出されるのかもしれない。

（増沢 高）

V. 文献

- 有村大士・才村純（2007）：子どもの受けるサービスと職員の業務，および負担に関する研究—タイムスタディの二次分析から—，子どものライフステージにおける社会的養護サービスのあり方に関する研究，平成18年度厚生労働科学研究費補助金 子ども家庭総合研究事業；85-95.
- 井出智博（2010）：児童養護施設・乳児院における心理職の活用に関するアンケート調査 集計結果 報告書，平成21年度科学研究費補助金「児童養護施設における心理職の活用に関する調査研究」.
- 加藤尚子（2002）児童養護施設における心理療法担当職員の現状と課題（1）—基礎集計報告—，日本社会事業大学社会事業所年報38；153-174.
- 加藤尚子（2005）：児童養護施設における心理療法担当職員による心理的援助と課題，立教大学コミュニティ福祉学部紀要7；1-11.
- 村瀬嘉代子（2011）：社会からの臨床心理学への期待，臨床心理学11（1）；9-13.
- 滝川一廣（1990）：情短施設における心理治療．杉山信作他編，子どもの心を育てる生活．星和書店，254-288.
- 滝川一廣（2004）：新しい思春期像と精神療法 金剛出版
- 内海新祐（2005）：児童養護施設における心理職の役割，母子保健情報50；181-184.
- 全国児童養護施設協議会（2007）全国児童養護施設心理療法担当職員に関する実態調査結果.

平成22年度研究報告書

児童養護施設における心理職のあり方に関する研究

平成23年12月14日発行

- 発行 社会福祉法人 横浜博萌会
子どもの虹情報研修センター
(日本虐待・思春期問題情報研修センター)
- 編集 子どもの虹情報研修センター
〒245-0062 横浜市戸塚区汲沢町983番地
TEL. 045-871-8011 FAX. 045-871-8091
mail : info@crc-japan.net
URL : <http://www.crc-japan.net>
- 編集 研究代表者 増沢 高
共同研究者 内海 新祐
古谷みどり
杉山 史恵
楢原 真也
相澤林太郎
- 印刷 (株)ガリバー TEL. 045-510-1341(代)